もっと
ゆっくり
大きく
飛べよ

教育出版センター

教育出版センター

〈著者略歴〉
羽鳥徹哉（はとりてつや）
昭和11年新潟県刈羽郡小国町生。
昭和43年東大大学院博士課程中退。
昭和45年4月より2年間，ハーバード大学イエンチン研究所研究員。
現在，愛知教育大学助教授。
〈主要論文〉「川端康成と万物一如・輪廻転生思想」（昭41.3「国語と国文学」）
「川端康成と心霊学」（昭45.5同上）
現在『川端康成伝』執筆中。

省検
略印

もっとゆっくり大きく飛べよ　　虫ブックス⑩

昭和四十八年十一月二十日　印刷
昭和四十八年十二月一日　発行　©

著者　羽鳥徹哉
発行者　柴崎芳夫
印刷所　長塚印刷株式会社
日台製版株式会社

発行所　株式会社　教育出版センター
〒170　東京都豊島区北大塚三―二九―三
電話（03）九一七―八九三〇（代）
振替　東京一四六一二

乱丁・落丁本はいつでもお取替えいたします　　0095―7201―1475

# 目次

テモテ前書第二十五章の八　23
お婆ちゃんと花見　37
ジーパン恋歌　49
借家騒動　59
九月十日の日記　73
東西宴会（パーティー）比較考　83
ユダヤの御寺　97

マサチューセッツの道ばた農法　143
ニューヨークの娘たち　167
ハーバードの語学教育　185
世界の中の日本文学　209
もっとゆっくり大きく飛べよ　253

カバー木版　恩田秋夫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

テモテ前書第二十五章の八

## 一、

三五郎君がアメリカへ行くというのは、どうもちょっとそぐわないところがある。さる有名大学の研究員だそうだが、いったいアメリカへ行って何を研究する気かしら。それに第一、英語を話したり、読んだり出来るのかしら。それというのも、三五郎君は国文出身のはずだし、あのぼんやりした顔つきからみて、とうてい自在に外国語を操れるタイプとは見えないからである。

それでわけを聞いてみると、どうも大変運が良かったという以外のことではないらしい。もっとも万事塞翁が馬で、そういうのがとんだ裏目の発端にならぬとは限らぬが、しかしまあとりあえずのところで言えば、運が良かった。

なんでも、三五郎君が学生時代に、そのアメリカの大学の日本文学の教授が日本へ来て、三五郎君その手伝いをしたことがあるのだそうである。ところがその教授の大学で、日本文学関係の研究員を呼ぶ費用が出ることになった。そこで教授はそれを探しに来て、その時三五郎君まだ学生の身だったから、むろん対象外の外だったが、その時に先生、三五郎君、そのうちあなたも勉強しておいて、アメリカへいらっしゃいよなどと、うっかり口をすべらせたものである。むろん三五郎君、そんな教授の言葉まともに取るはずはなく、だいたい在外研究員という柄ではないと、自分のことを思いこんでいるから、本気にも当てにもしていなかった。

ところが第一回目の人が、その人は年齢からいっても業績からいっても、研究員として恥しく

ない人だったが、その人が一年間の務めをおえて帰ってしばらくして、その教授から三五郎君のところへ、こんどはあなたどうかといって、手紙が来たというのである。あなたもちゃんと大学の先生になったのだし、だいぶ一生懸命研究もしているらしいから、アメリカへ来るのもいいんじゃないですか、というのである。

むろん三五郎君もアメリカという所は行ってみたかった。行ってはみたかったが、どうもまだその任ではないという気がする。かけだしの新任教師で、しどろもどろの授業で学生に迷惑をかけている。また先輩学者たちで、こういう人こそ研究員としてふさわしかろうという人たちは、ぞろぞろしている。まあ大げさな話をすれば、たかが一介の研究員とはいっても、むこうへ行けば、日本の国文学界というもの、あるいは日本というものを、何らかの意味で判断する材料とされるだろう。あんまりひどいのがでかけて、恥を天下にさらすようなことになっては、問題は三五郎君一人のことではおさまらぬのである。

そこで、そりゃあもう行ってはみたいけれど、そんな研究員などという仕事が、自分に務まるとも思われない。しかし、つとまるつとまらぬといったところで、それも自分考えというものだろうし、私の先生に当る方は、日本の学界でも第一人者という偉い方だから、その先生の意見も聞いてみてほしい。その方がいいというなら、私も行ってみることにしたいと、そんなふうな返事を出しておいた。

しかしこれはまあちょっとずるいやり方で、いくら偉いといったって、先生などというものは、自分の弟子とか学生とかのことを、そうそう悪く言えるものでもないのである。あんなのは

しょうがありませんよ、とも、先生言いにくかったとみえて、三五郎君とうとう行くことにきまってしまった。

## 二、

しかし難点はそれだけではなかったのである。実は三五郎君、自分の母親まで引具して出かけたいという希望を、ひそかに持っていた。

というのは、研究員も、はじめから本人の費用しか出ないというのだと問題もなかったのだが、そこがアメリカで、細君の旅費まで出してくれる。当然二才の赤ん坊娘もついて行く。すると、長い間待ちに待って、ようやく息子と同居できるようになったばかりの母親が、またもや一人暮しを強いられることになる。

母親は気丈な女だから、一人暮しをして出来ないことはない。しかし三五郎君のお嫁さんが、しゅうとめと別れることでほっとしているふうがある。気づまりな生活を逃がれ、伸び伸びするのに、いい機会だと思っているらしい様子がある。それももっともという点がないではないが、しかしそうなると、三五郎君としては逆に、いっそ細君の方も残して自分一人で行くか、さもなければ両方連れていく以外にないという気持になってしまう。

また、息子の留守中母親は、長の旅路に云々と、浪花節か何かになりそうな話が、世間によくある。現に三五郎君の身近でも、そういうことが起っている。野口英世の時代ならいざ知らず、

今時そんな浪花節はいやだ。それくらいだったら、三五郎如き分際で、なにも無理して出かけるにはあたらない。

一方、三五郎如き分際ならなおさら、生意気にぞろ〳〵家族なんか引っぱって行っちゃあ、それこそいけないんじゃないか。偉い先生なら、遊んでたって研究員の仕事くらいつとまるだろう。三五郎如き分際では、それこそ我を忘れ、逆立ちしてがんばらなければ、人の半分にも追いつかぬにきまっている。それが細君はおろか、母親まで引っぱっていって、まともに仕事が出来るものか、という気持もある。

あれやこれや考えると、三五郎君、全く途方にくれてしまう。

## 三、

三五郎君の母親は戦争未亡人である。今を去る三十年以前、三五郎君二才の時に夫が戦死した。

家は自作農で、しゅうとしゅうとめもぴんぴんしているし、さし当って生活に困るというようなことはなかったのだが、敗戦のどさくさの中で、しゅうとしゅうとめも相次いで亡くなるし、三五郎君が一人前になるまでという約束で小作に出していた田も、その幾分かは、うやむやのうちに人手に渡ってしまうというようなことが起っていた。

小学校を出るか出ないの三五郎とたった二人っきりになって、母親の苦労は、その頃から本格

的になった。もう嘆き悲しんでいるひまもなく、田打ち、畑打ち、稲始末と、男でなければかなわぬようなどんな仕事にでも、きゃしゃな女の体で、精一杯ぶつかっていく以外に、手だてはない。そういう彼女を貫ぬいている思いはたった一つ、夫やしゅうとから託されたこの家の田地田畑を、女ゆえになくしてしまったなどということが、絶対にあってはならぬということである。三五郎君が一人前になるまでは、何が何でもがんばりぬかねばならぬ。

とはいえ現実には、女手一つで、山間の農業の仕事がとうてい無理なのは、ほぼ目に見えていた。今のように、機械もなければ便利な燃料もない。作業は全て直接に体を使わなくてはならない。鍬で打ち起こし鎌で刈り、物を運ぶにも、山坂を背に担うほかは、平地でわずかにリヤカーが利用できる位のものである。ガスなどというものはないから、毎年春に山の雑木を切り、お盆あげくの農閑期に、それを山から運んで家に収納するというのが、これ又冬に雪深い山地の欠くことの出来ない作業の一つになっている。

そういう全てを、とうてい女と子供でやりおおせるはずはなかったのだが、幸い彼女の実家や、夫の姉妹らの嫁ぎ先きが近い所にあって、そういう親戚、一族郎党が、黙って見ていない。自分の家のこと同様にして、春秋のけじめなく、できる限りの援助をしてくれようとする。しかるべき日をきめて一同集まり、大事な仕事を片づけてくれることもある。あるいは母親と三五郎と二人、広い田の稲を刈りわずらっているような時、自分の家の仕事を早めに切り上げた叔父や従兄たちが、予告もなしにどっとやって来て、たちまちに刈り上げ、運び出し、はさにまで掛けてくれるようなことが、何かにつけてよくある。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

そういう時の母親も三五郎も感謝でいっぱいで、しかしそういう人の助けを、有難いと思いこそすれ、決して甘えていてはいけないというのは、母親の絶えず言うことである。人の親切をいいことに、自分が楽をしようなどと思ってはならぬ。親切にしてもらえばもらうほど、こちらもそれだけ自分の身をつくさなければならぬ。

そういう母親の気持は、そっくり少年三五郎君の気持でもあって、すでに小学校時代から、三五郎君は学校に居残りして、遊んでくるというようなことはなかった。特別な場合でもない限り、さっさと帰って着物を着かえ、野良へ出るのを常としている。

はなはだ感心な見上げた態度と言わざるを得ないが、何がどうなるか世の中ははかり難い。そういう律気さゆえに、かえって三五郎君は農業を捨てざるを得ないことになったという見方も、一方からは出来る。

何にしても、まだ体もととのわぬ三五郎君に、百姓の仕事はつらすぎたのである。ことに中学を終ると、この土地では若い衆の仲間入りをして、何でも一人前にやらぬと恥しいという気分がある。三五郎の場合はそういう気持と、自分は人の世話になっているのだから、なおさら誰にも負けぬくらい仕事をしなければならぬという気持と、二重になっている。

そこで中学をおえたばかりの、また戦争っ子で、大事な時に食べるものも食べなかったひょろひょろのちびの小童(こわっぱ)が、ひどい無理をする。大人と同じ調子で田を打ち、大人と同じ調子で稲もかつぎ、たきものの荷も背負わねばならぬと思っている。炎天下を、肩に食いこむ荷縄の痛みに耐えながら長い山道をたどってきて、それもはじめ二、三往復は我慢しても、六回、七回と回を重

ね、なお太陽はかんかんと天に輝き、いつまで続くこの作業かと思う頃には、いくらこのいくじなしめと自分を恥じに恥じても、耐えがたい重みに伏せた顔から、涙は汗と一緒に、おさえようもなくあふれ出しているという始末である。

そういう無理はせず、ゆっくり一人前になるのを待てばよかったのだろうが、やはりそれが運命というものだろう、百姓の仕事はあんまり自分につらすぎるという気持の昂じに昂じた果て、三五郎君突然気狂いのようになってしまって、とうとう百姓を捨てるという、一つの垣根を跳び越えることになってしまった。

財産もいらぬ、田もいらぬ、そんなもの売り払っても大学へ出たいなどと、わけもわからず、憑かれたように言いはじめたのである。なまじ中学の時の成績が少し良く、学問でもすれば何かになるなどという気持があったから、なお悪かったのだろう。

そうなるとこれまでの母親の辛苦も水の泡、何が何でも田畑守り抜いてと思っていたのが、かといって息子に気狂いにでもなられたのでは元も子もない。それこそ暗闇の滝壺へでも飛び込むつもりで、三五郎の大学進学を許す以外にないというところへ、追い込められてしまった。

だが、そういうふうに、自分の望み通り進路を変えようとした時、三五郎君、おのれのエゴイズムということを、いやというほど嚙みしめて感ぜざるを得なかったそうである。

第一に彼は、農村を裏切ったという気がしていた。というのは三五郎君、常々友人たちと、一体どうしたら農村を救えるかという問題を真剣に話し合っていたからである。真剣にといったところで、そんな方策のおいそれと立つはずもないから、いつも雲をつかむような話でばかり終る

が、そういう、理屈でつかめぬところは何で補うかといえば、今は解らなくてもそのうち何とかという、ひたすらなる情熱だけである。食いこむ荷縄に耐え、背の痛さに涙が流れてもなんでも足踏みこたえなければならぬというそういう意地を支えるものの幾分かに、そういう意味での情熱も影を落している。大学へ進むということは、そういう情熱の戦列を離れることである。共に語り合った友を裏切り、農村を裏切ることである。

第二に三五郎君には、自分が結局親戚への義理も欠き、母を犠牲にしようとしているという気持があった。

中学を終る時から、もうこれで三五郎が所定の教育をおえ、朝から家業に精出してくれると楽しみにしていた母親である。ところが先生やら周囲やらが勧めて、三五郎君は定時制高校へ通うことになった。週二日か三日の学校であとは家の仕事が出来るし、それに農学校だから、家業の役に立たぬというわけではないということが口実になっている。そしてその四年の学校を終って、こんどこそ真剣に野良仕事にいそしんでくれると思っていた矢先きの大学進学決定である。朝から仕事を手伝うどころか、逆にまるっきり仕事を離れてしまう。こんどこそ相手もなく、ほんとうに一人ぼっちで女が百姓の仕事をしなくてはならぬ。リヤカーを引くには後押しがいる。はさを掛けるにも相手がいる。二人なら動かせる荷も一人では動かせない。相棒もない女が、一体この先きどうやって仕事をやっていくか。こんどこそ親戚の世話も、そうそう受けずにやっていけることになると思っていたのに、逆にますます親戚の手助けを待つことになるだろう。そういうことを考えたら、とうてい抜けられるはずもない百姓の仕事を、あえても目に見ないように

して捨てて、それでも大学へ行きたいという自分は、それこそ母にも親戚にも、この上ない大不孝、大不義理を重ねることになるのである。

ことに、三五郎君が大学進学の方針を決定したのは、三年生の冬のことだった。ついに母親が、ではおまえ、大学へ行ってみるか、と決心して三五郎に言ったのは、雪のふぶく停電の夜で、たしかいろりの赤い火が、むしろのけば立ちを照らしているような晩ではなかったかという。外にはごうごうと吹雪が渦巻いていて、そういう母の言葉に、嬉しさがどくどくこみあげる一方で、三五郎君、自分が書いたある創作めいた作文の内容を思い出していたという。

それは学校で自分達で出している、ガリ版刷りの小さな文芸誌に載せたものだが、雪の中で死んだ、ある老人のことを書いたものである。

その老人は、かつてはこの村の庄屋の出で、東京に居を構えていたが、戦争末期に、まだこの村にたった一つ残しておいた自分の家の土蔵に、子供達と一緒に疎開してきた。戦後、子供たちはそれぞれに道を求めて出て行ったが、だれもまだ父親を養うほどの力はなかったから、老人はいつまでもその土蔵に置去りになっていて、とうとうこの土地で亡くなってしまった。

土蔵には井戸がないから、三五郎君の家まで水をもらいに来る。三五郎君もよく助けてやったが、老人の体験した最後の冬は、これはかなりにすさまじいものであった。

もともとは大柄で声も太く、顔だちに品位のある人だったが、もうその頃は綺麗だった白髪も薄汚れてしまっている。一張羅の和服が、すえた匂いを発していた。

そうして、たとえばある暗いすさまじい吹雪の日の午後に、いきなりがらりと三五郎の家の表

の戸が開き、ひえっと悲鳴とも何ともつかぬ声を上げながら、雪まみれの老人がのたりこんで来たことがあった。断わりの挨拶もあらばこそ、いきなり燃えているいろりの火に、身をおおいかぶせるようにする。汚れた襟巻きを頬かむりにし、そこにはみ出した髪から眉毛から吹雪がいっぱいに吹きつけていて、それがいろりの火に溶けかかると、流れるものは水とも涙とも鼻汁ともつかなくて、老人の顔は泣き笑いに歪んでいる。

おそらく老人は、火の気もない家に蒲団をかむったまま、動くのもいやでじっとしていたのだろうが、そのうちに腹は空く、寒さは寒し、我慢しきれなくなって起き出してみても、湧かす水もないのではお話にもならぬ。手桶片手にやおら表の戸を開けると、外は吹雪で、道踏みもしない玄関先きはずうっと裏の本通りまで、深々と積雪にとざされている。一歩踏みこむと容赦なく雪は長靴に入り、しかも火の気のない家でこごえていた体に、たださえ冷たい吹雪の外気はたちまちに骨を刺し、もう戻るもひくもかなわなくなった老人は、しゃにむに泣きながら深雪（ふかゆき）の中をよろめき渡り、叫びながら三五郎の家の戸を、ひきあけたのに違いなかった。挨拶のことばもあらばこそ、何か声を出せばそれは嗚咽にでも変ること、その泣き笑いに歪んだ顔が如実に物語っている。

老人はその次の春かに、親戚の人達に病院へ連れていかれそこで死んだが、三五郎君は、老人が吹雪の家で死ぬことにして、その作品を書いた。

遠く彼方の夜を渡る風の音、と思うとにわかにそれが逆巻く怒濤となって押し寄せ、小さな一つ家など、たちまち木端微塵の目も当てられぬ大音響に包まれる。屋根は鳴り、二重の板戸のわ

ずかな隙を求めて、ひしひしっと吹雪が銃撃の音を発して内へ吹きこみ、誰一人訴え頼る人もない孤独の家の薄暗がりに、仏壇の金箔だけが鈍く光っている。

そういう冬の恐ろしさを身にしみて知っているはずの三五郎でありながら、そういう一つ家へ、たった一人の母を置いてけぼりにしてまで行こうとしている大学とは一体何なのか。何の意味があるとも知れぬその大学へ、あるいは意味がわからぬからこそ、盲滅法に、何が何でも行ってみたいような気になっているのだろうが、そういう自分が、この上もなく醜くく、おぞましいものに見えたというのも、なるほどそれはそれで当然というものであろう。

そうして三五郎という男は、醜い、醜いと自分を責めさいなみながら、結局その醜いことをおし通して行ったのである。どうせ通すくらいなら、もっと雄々しく、男らしく進んでよかったのだろうが、自分をエゴイスト、裏切り者と責めさいなみながら、そのしんねりと暗鬱な顔を世の片隅にさらす、あるいはそのようなものとしてばかり自分自身を見がちであるという三五郎の心の習癖は、その頃からついたようである。

しかし母親のことはともかくとして、三五郎の、自分は農村を捨てた、裏切ったという考え方は、あるいは三五郎自身には気に入っているかもしれぬが、全然別な見方も成り立つのである。

御承知のように、三五郎が百姓を捨ててほんの二、三年した頃から、農村の傾向は大きく変りはじめて行った。つまり、日本の農業はあまりに小規模経営すぎて採算がとれない。そこで農民の多くを都市へ吸収し、吸収されて減った分だけ、他の農家が大規模経営が出来るようになるという、いわゆる農業構造改革なるものが、国の方針としておしすすめられていった。遠からず農家



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com